

## チャンス

菅田 忠志

いつだったか、女房に「神様は誰にも人生3度くらいは『富くじ』に当たったようなチャンスを与えてくれるらしい」と話したことがある。「ただ、そのチャンスに本人が気づくか、逃してしまつかまでは、神様も面倒は見てくれないらしい」と付け加えるとしばらく考えていた女房が「ふーん、3度のチャンスねえ…」と、なにか意味ありげな返事をしてきたので、「なにが思い当たる節でもあるのか?」と聞き返すと、「昔の『富くじ』ってどのくらいこの価値があったの?」とききた。

さて、昔『富くじ』と呼ばれたものは、今風の『宝くじ』のようなものだが、はたしてその値打ちはどれくらいだったのだろうか。

一生に3度も当たる『富くじ』なんて大したことなぞそう、とでも言いたいのか、少々乗りの悪い返

- 1 -

事につかりしながら、「そつやなあ、今の値打ちやったら…」

と、興味半分で調べてみたところ、昭和51年の東映映画で「富くじ殺人札」というのがあった。そのあらすじは、「富札で五百両が当たった仙吉が祝勝の宴で変死…」という事件から始まった。時代設定が天保年間のことだから、五百両といえばやはり相当な金額で、今時の数億円に匹敵するくらいになりそうだ。

ところで、我が家にも『富くじ』は舞い込んできたのだろうか。

いろいろ思い出しながら考えてみたが、あまり思い当たる節もない。一生に3度だと、すでに2度くらいは「当たり」があってもよそそつなものだが…。昔から抽選というものには、とんと縁のなかった人生であったので、そんなものはなかったのか、気がつかないまま見過ごしてしまったのだろうか。

何も無いのもちょっとシヤクだったので、「まあ

- 2 -

お互い、いい相手との出会いに恵まれ、子供達も素直に育ち、孫もいるんだから、富くじ2回分くらいにしよつか」といって、「やっぱ安いわー」と言いかけたのをぐっと飲み込んだのか、一呼吸おいてから「そつちねえ、お母では買えない富くじやわねえ」

たしか、この日の晩酌のさかなは一品多かった。

きつと神様から「やつと気づいたか、もつと今を大切にせえ」とのお告げがあったのだらう。